大阪■■哲学学校■■通信

No.35 2006.1.28.

大阪哲学学校運営委員会 Copyright©, 2006
【郵便振替】01170-1-81313
【E-mail】oisp@mac.com（臨時アドレス）
【Home Page】http://oisp.jp/
【Net Forum】ホームページに掲示板を開設
【代表者】 山本 晴義（校長）
【発行者】 平等 文博（運営委員長）
【編集者】 平等 文博

２００６年を迎えて

山本　晴義（大阪哲学学校校長）

新年を迎えて皆さん、それぞれの思いをかかえて、過ごされていることと存じます。私は昨年来、あまり良くないことが続いたので、活気がなく、１０年ほど前から依頼されている大阪の孤高の「マルクス主義」の哲学者、藤本進治さんの「解説」（こぶし文庫）を書いています。

ただ大いに溜飲を下げているのは、先日来のマンションやホテルの耐震強度偽装の非人間性が露呈したのと､昨年の総選挙で小泉「構造改革」の象徴、「勝ち組」のシンボルと囃されたライブドアの破綻が、はっきりしたことです。これは６０年代末「フォーディズム（福祉国家）」が崩壊し、その後脱冷戦、イラク戦争の過程で、現在、世界やアジアの中で次第に孤立しながら、相変わらず一体になって強行しているブッシュ、小泉路線の帰結です。つまり「新自由主義」と「ネオ・コン」です。

昨年、ＪＲ西日本の事故で体験した「安全より利益」、「民営化」、「資本の競争」、やはり１９９８年やったマンション・ホテルの「指定確認検査機関」の民営化（「安く速くを売りものにする検査」がそこでは基準になる）。何か“革新的”であるかのように錯覚させる「規制緩和」！

これが戦後確立した労働基準法を破棄して、リストラ、フリーター・ニート、低賃金、長時間労働、過労死、自殺を生みだす。

昨年８月のＯＥＣＤ（経済協力開発機構）の調査によると日本は世界中で“貧富の格差”が大きい国の第５位（先進国ではアメリカについで第２位）です。ますます少子化がすすみ、人口が減少する。人間の相互の連帯が無くなり、弱肉強食、モラルハザードが出現する。最も弱い少女がねらわれる。そして、さらに、やはり「ネオ・コン」、１４道府県自治体知事の反対を無視し、在日米軍の再編によって世界一極支配を！

憲法改正を！

藤本進治さんは６０年代末のフォーディズムの崩壊、ベトナム反戦、反公害運動、スチューデント・パワー……の爆発の中で、すでに“新しいパラダイム”における“闘いの質の転換”を説いています。つまり「日常生活世界」におけるローカルな、そしてグローバルな闘いを根源的な「文化革命的闘い」だとして強調しています。上からでなく、多様な国境を超えた「ライフス

タイルの政治」、「複数党派のネットワーク」を、もちろん未だ曖昧な点を残していますが、するどく説いているのは“すごい”と思いました。私は現在、かつて藤本さんが説いた、“新しいパラダイム”は、より複雑に、危機的に深刻化していると考えています。今年の大阪哲学学校ではこれら諸問題についての深い討論が課題ではなかろうかと思っています。

《年頭所感》

ローマの哲人セネカと中野孝次、断章

松尾　猛省（会員）

２００５年も去り、２００６年の年頭、みなさん、明けまして、おめでとうございます。

静かな元日の午後ＰＣに向かい、キーをたたいています。その日の朝、平等さんより元旦のメールを拝受、＜底なしの腐敗と社会の混迷に多くの人が呻吟するなか、大阪哲学学校は、今年開校二十周年の節目を迎えます。「哲学と生活現場の結合」という目標はまだ、道半ばですが、皆様と共に新年もさまざまな問題について、批判的、根底的、総体的に考えていきたいと思います。＞

＜底なしの腐敗と社会の混迷＞その冒頭の言葉に意をつかれ、昨今の世を、その典型が昨年の暮れに見た耐震偽装建築であるが、その風刺が＜アゲハする＞という流行語さえ生んだ。

まことに、けったいな時代で、世はまさに泰平、バブル崩壊後の日本経済は不良債権の解消と景気浮揚のはざまの影で予想だにせぬ、地震に慄く不良建築物をみて、唖然たる思い、また、次になにが起きるやも知れぬ世相を見るばかりである。

平等さんの掲げる ＜哲学と生活現場の結合＞の理念について今一度、ここに思い起すのも、年頭に際し無駄ではなかろうの思いがした。

標題のセネカを述べる前に、本誌でも掲示の講演会で話されたシェリングでお馴染みの哲学者、西川富雄さんの講演会についてひとこと触れさせていただきたい。

昨年末に西川さんをお迎えし、JR 尼崎、最寄の会館で講演会を催す好機に恵まれた。

演題は「21 世紀の日本の行へ」であったが、前半はやはり持ち前のシェリングに。そのシェリングに執りつかれた動機がシェリングの＜自由の本質と悪の問題＞で、人間の実存が悪なしにはありえなかったとの捉え方に惹きつけられたとの思いも述懐、近著の『哲学生活五十年』でも述べられているが、その学究の傍らに哲学が現実社会にとり遊離したものであっては、哲学することに意味もないことへの憂慮と逡巡、その先覚者梅原猛氏とともに強調されていることであった。世にいう西洋哲学者の学説を、探求、伝授することで足れりとする現今の哲学学会に於いては、瞠目すべきことではないかと思った。西川氏においては、哲学と現実への関わりが、立命館大退任後もＮＨＫ早朝ラジオ番組で、対談形式にて放送の『心の時代』を話されたシェリングの自然哲学とのかかわりにおいての環境問題は、人間中心主義による自然破壊を懸念し、21 世紀の切実な課題として、警告をつげられている。

その細部については、本論の主意ではないが、その底にシェリングの自然への形而上学的思念、それは端的にいって自然への畏敬の念であるが、それを抜きにしては続出する公害や、自然破壊の今日的問題を解決できない可及的な課題を帯びている様に思うのであった。

西川氏は現在、京田辺市の住まいに於いて、人生哲学塾を開講、近隣の主婦層が十数人集り、

氏を囲んでの忌憚の無い哲学と人生への議論に花咲く。なんとも、これこそが身近な哲学と生活現場へのつながりではなかろうか。それを思うに、わが哲学学校では、殆ど参加数稀な女性たちのありかとは全く対照的である。

さて、前置きはこのくらいにして、本題のセネカについて述べてみたいと思う。

セネカを知ったのは、いうまでもなく、先年他界の中野孝次著『ローマの哲人セネカの言葉』である。本書によれば、イエス、キリストと同時代に生きたセネカということである。

略伝によれば、生まれはスペインのコルドバ、一家は裕福で、父は修辞学で有名、母は文学と哲学を学ぶ家系である。

セネカは初め弁護士として活躍する。彼は短足、近眼の醜男だったが、不思議と女性に好かれ、その援助で道をひらくこと多かったといわれる。彼の巧みな弁論術は有名で、嫉妬した皇帝カリグラに殺されそうになった話や、次代クラウデイス帝時の皇后にまつわる女性間の熾烈な争いに巻き込まれ、姦通の濡れ衣で追放され、この間彼はもっぱら哲学に慰め求め、「母ヘルヴィアへの慰め」を書く。

やがて、皇后アグリピーナはセネカを呼び戻し、法務官の職を与え、息子ネロの家庭教師を命ず、彼女はネロを次代の皇帝への野心を抱き、そのためにセネカの人気と力を必要とした。が、養子ネロでなく、実子を皇帝にしょうとしたクラウデイス帝を彼女はついに毒殺、ネロを皇帝に据えた。その年から五年間がネロの顧問官としてセネカが、宮廷と政界の頂点にあつたといわれる。が、後の皇帝の妻との恋など絡み、次第にネロとアグリピーナとの仲は険悪化、ネロは遂に母親殺しを行う。この時からセネカはネロを見放し、莫大な全財産の献上と共に引退を申し出る。それからの数年間が、セネカがまったく閑暇な時間の中で哲学に没頭できた最も幸福な時期だといわている。

だが、彼はピソのネロ暗殺事件に加担した嫌疑で、ネロの死の手を逃れることはできなかった。彼の生涯を見る限り、その数奇な運命に唖然とするが、数々の哲学論文を読む時、我われは二千年後の今日に於いても、その底にいきづく特異な哲学理念を読み取る思いがする。

『人生の短さについて』（岩波文庫）は、彼の「道徳論集」から三篇を取り上げた一編であるが、中野孝次氏は本書を読む内にその文章の魅力に惹かれ、彼の哲学論文集を全部読むに至った動機を述べている、私も同様にその感をつよくした。

「人生は短い」――よく言われるセリフであるが、セネカによれば人生は短いわけでなく、ひとはみな充分な時間をもちながらも、多くの人は空しく浪費しているだけだといい、それをいちいち細かく例証を挙げて説いていく。

＜人生は使い方を知れば長い＞その核心の思念であるが、世の中には貪欲に捉われるもの、酒びたりになるもの、怠けボケしているものと辛辣である。そして、財産を守ることはだが、時間を投げ捨てる段になると、最大の浪費家と変わる。……諸君は永久に生きられるかのように生きている。満ち溢れる湯水にでも使うように。ところがその間に、誰かに何かを与えている一日は、諸君の最後の日になるやも知れないのだ。

多くの人々が「私は五十歳から暇な生活に退こう、六十歳になれば公務から解放されるだろう」。では、お尋ねしたいが君は長生きする保証でも得ているのか。……実際多忙な人に限って、生きること、すなわち、よく生きることは稀である。生きることは生涯をかけて学ぶべきことである。そして、それ以上に不思議に思われるであろうか゛生涯かけて学ぶべきは死ぬことである。多くの大偉人は一切の邪魔者を退け、財産も公職も快楽も捨てた上、ただいかに生きるかを知ろうとする。このことのみ、人生の最後まで唯一の目的とし続けた。……偉大な人物は、自己の時間からなにひとつ取り去られることを

許さない。それゆえに、この人生はきわめて長い。用いられる限りの時間を、ことごとく自分の時間にあてているからである。」(岩波文庫『人生の短さについて』茂手木元蔵訳)

私見をはさむ余地もない。私が驚きもし、瞠目したのは本論が皮肉にも、セネカの宮廷の政治に、権力的にも絶頂期にあった多忙なその時期の合間に書き綴ったものといわれるだけに、驚愕の念禁じえない。まさに哲人の底にもえる溶岩をみる思い。

セネカにとっては職務につくことと、生きることは完全に別次元であったのである。

ひとへに、多忙こそがその重要さの証しであるかのようにみなす世間の常識とは、全く裏腹で主客転倒している思いがする。多忙さの中にあってもセネカの憧れは、昔から賢者たちのした如く、自分の心を内側に向ける自由な時間を何よりも欲し優るを前提とした。

「道元、断章」を顕した中野孝次氏はセネカのよく生きることは死を学ぶこと、それはひっきょう、毎日を最後の日と思って生きることに繋がるのであるが、道元の禅の極致が「今ココニ」生きるにあるとした考えと、二千年前に生きたセネカが同じことを言っているのに心酔、共鳴している。　いたずらに百歳いけらんは、うらむべき日月なり，かなしむべき形骸なり。(「正法眼蔵」行持）　この「歌」は、長寿をむげに褒め称える現代世相とは全く対照的である。

さて、あちこち、彷徨しながらの年頭所感となったが、ぼちぼちこのあたりでけりもつけたい。が、何をもってと思ううちに、先の「道元断章」中野孝次の巻末のことばが、その緒端となった問題にも肉薄するように思うので、ここに掲げ締め括りたいと思う。

今では死語となった「求道心」だが、かつては、人は道を求むべきものという風が、何百年もこの国に吹いていた時代もあった。人は生まれてきたままでは人間とならないという、そのごく当たり前のことが、しかし日本ではここ五十年の間に見失われてしまった。欲望を速やかに充足することがよしとされ、人は欲するまま快適安楽に生きるのが一番という風が支配的となった。

それがいまこの時のこの現状をつくりだしたのだ。その結果、もはや、人間とはいえぬような生き物が横行する国になってしまった。かつては「畜生にも劣る」という言い方をしたが、今は、動物のほうがはるかに立派に生きていることが分っている。

理由もなく自分より弱い者の首を切ったり、駅前の中に飛び込んで無差別殺人を行ったり、少女をさらって十年近く監禁したり、１７歳の男がゆきずりの主婦を殺したり、今この国には狂っているとしか言いようのない事件が次々と起る。大の大人でもおなじことで、金融事件が起きるたびに、高級官僚、頭取、社長やが、善悪の判断も責任感もない連中に過ぎなかったことが判明する。すべてこれ、人間の生きるべき「道」がなくなったためである。人が「道」を求めなくなったためだ。」

中野孝次氏は本書を顕した後、四年後（2004年６月) 黄泉の国へ旅立つ。その憂悶の声が草葉の陰に、以後も止むことなく、ＰＣのやりとりが諍いのもとでの少女同士の殺傷事件や、また、幼女、学童が帰途さらわれ、絞殺される事件と絶え間ない。いまや、学童の通学に警備員を配慮との声さえ聞くまことに憂慮すべき時代である。

この混迷の時代に果たして出てくるもののモグラ叩きだけで事態は治まるのか、即効薬のない無策の現状とはいえ、いやそれ故にこそ、いまや時間をかけ、総体的にこの国が戦後なおざりにしてきたものを、いま一度、洗いなおす時期にきているのではないかと思う。中野孝次氏の杞憂のことばも併せ、生活現場との結合をうたう哲学学校もまた、難関、難問とはいえ、決して他山の石ではないはずと思った次第である。

亡き藤田友治氏の意志を継いでいこう！

義積　弘幸（会員）

昨年の夏、藤田友治氏が突然亡くなられた。正月のめでたい席に〈死〉について触れることは縁起が悪いと言われるかもしれないが、人の〈死〉と〈生〉は不可分なもので、時を待たないのだから、それも許されようと思う。

これは私事になるかもしれませんが『通信』２２号の「私の提案—大阪哲学学校を〈知的協力会議〉へ」という拙稿に最初に反応してくださったのが藤田氏なのでした。氏は「提案に賛成します。大いに議論を『通信』でしましょう。」（同２３号）と即賛成してくださいました。

最近『通信』は「執筆者の固定化が改善されず、投稿数自体も少なくなり、発行遅延が常態化しつつある」（『通信』３４号「総会報告・抄」）とあります。私自身も含めて「カツ」をいれる必要があるのではないでしょうか。

再び、藤田氏のことにもどりますが、氏の〈死〉が一種の過労死であったような気が私にはしています。何も権威者から無理に仕事をさせられたわけではないでしょうが（おそらく、逆に権威に立ちむかう人だったでしょう）、学校の休みの土、日も会合や執筆等に多くの時間をさかれていたことが、氏をよく知る人から聞いています。正（まさ）しく、その行動こそが、氏の志（こころざし）、〈歴史の真実に迫る〉ことだったのでしょう。

最近の靖国神社への小泉首相の参拝、教科書問題等で中国とコリアとのあつれきが生じたことや戦前のようなナショナリズムの復活などに対する焦燥感もあったかもしれません。

なぜなら、藤田氏の学問のスタンスが、特に中国とコリアと日本の〈間（あいだ）〉に立つというものではなかったかと思われるからです。したがって、両者と日本の関係の悪化はこたえていたのかもしれません。

〈歴史（特に古代史）の真実に迫る〉ことは、大変なパワーが必要だったと思います。我々の多くは（私も含めて）文献操作、それを練りあげて文章化して完結します。そして、それを世に問うのです。

しかし、氏は、それだけでは納得できませんでした。フィールドワークと文献のウラまで読むことが必要でした。それには何より体力がいったと思います。休養も必要だったでしょう。しかし、氏は、それをしませんでした。

もし、休まなかったことが、藤田氏の〈死〉を早めたとしたら、それは大変残念なことです。

私（たち）は、科学・哲学者高橋準二氏に続き、また〈古代史の研究半ば〉で藤田友治氏を失いました。私（たち）にとって、このような悲しみはありません。特に、藤田氏が素晴らしかったことは、芥川賞作家高城（たき）修三氏の『大和は邪馬台国である』（東方出版）をミネルヴァ書房に入れたことでしょう。

氏は決して読者に自説だけを押しつけ、他説を隠ぺいしなかったのです。己れも述べる。しかし、他説も公（おおやけ）にする。結果は読者にゆだねる。それが藤田古代史研究のあり方でありました。

しかし、残された私（たち）は、《涙は後に流し、生きて泳ぎましょう。》

中島みゆきさんは「命のリレー」（ＣＤアルバム『転生（てんせい）』所収）で次のように歌っています。

《この一生だけでは辿り着けないとしても　命のバトン摑（つか）んで願いを引き継いでゆけ》

これは、戦後文学者、未完成長編『死霊（しれい）』の作者埴谷雄高氏の提唱した〈精神のリレー〉を彼女なりに歌った唄だと私は一回聴いて直観し

ました。

私は、この〈命のリレー〉〈精神のリレー〉を念頭にあたって、みなさんに伝えたいと思います。そして、これを私の２００６年の年頭のあいさつ代わりとしたいと思います。（2006.1.1）

〈知的協力会議〉のイメージ（義積）

A　今日は、〈知的協力会議〉ということについて話したいんだけど……。

B　なぜ、君はそのことについて話したいんだ？

A　ええ。これは「大阪哲学学校通信」２２号にも書いたんだけれども、「第一次大戦後、西洋の情況を憂えた知識人たちが集まって、将来のことを考えた名」から取ったもので、「議長はベルクソンで、ヴァレリーたちも出席した」と聞いている。

C　日本なら「賢人会議」というんじゃないかな。

A　僕はその言葉が嫌いだから〈知的協力会議〉という言葉を使うんだよ。

B　なぜ、それではいけないんだね？

A　まず、誰が一体、その人が「賢人」と決めるのさ。

C　政府かな。

A　そういうどこか権力を持っているところだろ。

B　つまり、それが嫌なんだ。

A　その通り。

C　まあそうかな。それは正しいと思うな、私も。

A　みんなで考えたらいいじゃないか。それが民主主義だろう。古代中国・戦国時代に登場した諸子百家の一派墨子は刺青を入れていたから、身分が低かったと言われている。墨子については、そのうち書きたいと思っているんだが……。愛知は身分とは、関係ないと僕は思う。

B　そう言われてみると権力じゃなく、歴史が選び、遺したわけだ。

C　つまり、その方が正しいわけだね。でも、現在、今生きている我々は、誰を選んだらいいんだ？

A　だから、みんなで本当に真剣に考えようと言うんだ。将来のためにもね。

B　つまり、どんな人の考えでも、少数意見も無視するなというわけなんだね。

A　その点から言うと、「哲学学校」は、その可能性が少しはあるわけだ。でも、みんなでとことん考えなければいけないけどね。

C　でも、その役割を「哲学学校」が担えるかな？

A　それを「やろう」と賛成してくれたのが、昨年の夏、亡くなられた藤田友治さんだったんだ。また、はっきり言い切ったのは氏と提案した私だけなんだけどね。

B　バカ言うな。そう考えている人はもっといるだろう。２人ということはないだろう。

C　校長もそうだし、運営委員長もそうだろう。

A　運営委員の人もそうだろう。

B　全員と言えるだろうかは疑問だがね。それにしても、もう２０周年か。私はまだ１０年の付き合いだけれど……。時のたつのは早いね。もっと燃えないといけないね。

C　しかし、千里を遠しとせずに来ている人もいるんだから。

A　でも、田畑さんは、もっと勉強して欲しいといってるね。予習が足りないと……。

B　もっと女性会員も増えていくといいね。女性からの「世界」の見方も大切だから。

A　とにかく、やれるだけやるということだろう。今は亡き高橋準二さんや藤田友治さんの分までね。

B　そうしないと２人も浮かばれないよ。

C　そうだね。さあ、ボチボチ頑張りましょう！

A　そうしよう！

B　誰のためでもなく、自分のためにね。

C　自分のためになることが、みんなのためになると本当にいいね。（終わり）

〈付記〉山本校長の対話の真似をしてみました。

革命について

前田　博之（会員）

安部公房の初の書き下ろし長編小説『飢餓同盟』は昭和２９年に大日本雄弁会講談社（現講談社）から刊行された作品だ。その古さにもかかわらず、この作品は現代における革命とは何かを考える上で有益な小説である。劣悪な労働環境で働く主人公・花井太助が自分の姉をてごめにした町の有力者に対して、地熱発電の鉱脈をある薬を飲むことによって「人間メーター」となって探す織木順一を中心とした「飢餓同盟」を結成して対抗するという内容だが、そこには近年注目を集めている市民通貨・無投票選挙の意義・そして家族と言うものの自明性を疑う視点が提出されている。

それについては、今年４月に出る予定の「行路」という同人誌に私の原稿が掲載されるので、そちらを参照されたいが、私が最も力点をおきたかったのは、人体に有害な薬へクザンを飲まされて「人間メーター」となって利用され、最後に死んでしまう織木順一のことである。ここには、人間が共同体というものをつくり、社会生活を営むようになって以来続いているスケープゴートの問題が提示されているに違いない。それはつまるところ、人間を拘束する「制度」の問題に帰着するのだ。

私は以前人間の「性」と「制度」について研究を続けてきた現代思想（ラカンやドゥルーズ＆ガタリなど）が、結局のところ資本主義社会の枠組みにはめ込まれて利用され、人間をさらに強力に拘束する方向へ進んでいると指摘した。しかし、「制度」はやはり人間が秩序ある社会生活をおくるうえで大切である。宮崎勤や酒鬼薔薇聖斗の事件が示すように、「制度」について無知である、コードを喪失した人間は危険である。高山文彦著『「少年Ａ」１４歳の肖像』（１９９８年、新潮社）によると酒鬼薔薇こと「少年Ａ」は学校や部活を絶対休まないなどの几帳面さ、真面目さ、責任感の強さをもっていた反面、びしょ濡れの漫画雑誌を拾って持って帰るなどのある種の「汚いとか鞄が汚れるといった感覚などまったくない」下品さを併せ持つ矛盾した性格の少年だったことが報告されている。これらの逸話から、この少年が生きていくのに必要なコード（禁制）を喪失していたことが想像されるのだ。

しかし、人間を拘束する「制度」（禁制）というものは過酷である。それは人間が歳を重ねるごとに残酷さを増す。『飢餓同盟』の花井が職場の工場で受けてきた屈辱のように、私たちの職場でのこだわり、上下関係、その目的にあるのは労働現場での緊張感の維持、生産性の向上（私はこれには限度があると思う）、あるいは職場での権力闘争（派閥争いなど）、そして過失責任（それがどんなに些細なことでも）の追及にあると思う。そして、現代の日本社会がこんなにフリーターやニートの海になり、働きたくても働けない、引きこもりを余儀なくされている人間が増えてしまったのも、基底にはこのタブーと第三項排除（いじめ、つまはじき、村八分といってもいい。今村仁司氏の研究に詳しい）に基づく「拘束」の問題があると思う。

だから重要なのは、私たちが自らの身体（あるいは精神生活）の制御法を公開すべきだと思う。それをしないから、宮崎勤や酒鬼薔薇のような怪物が出現してしまう。これはタブーの解禁とは矛盾するようだが、完全な自由というのもまた、幼児期の思考・身体形成期においては

危険な環境ではないか。人間はそのスタート時点においては、ある種の規制を必要とする。私はこの文章を自分でも矛盾していると感じつつ書いている。それは両義的なのだ。タブーの解禁を唱えるとともに、そのタブーを公開して、社会的制度として確固たる、オープンなものにせよと言っているからだ。けれども現行の制度下ではどうしてもこのシステムについていけない人間が出てくる。もっとはっきり言うと、第三項排除の原理とともに、彼らを犠牲にして、このシステムは成り立っているのである。

今の私に言えるのは、この制度・禁制に対し、規制の敷衍化と情報公開、その相矛盾する両面の相克によってしか、このアポリアを乗り越えることは出来ない、ということだ。現行の制度を人道的に適切、明解なものにつくりかえることが急務と思えるのだ。例えば、冷暖房が完備された快適な室内で働くサラリーマンの作法が、屋外で雨に打たれ、または炎天下で汗だくになって働く肉体労働者にそのまま適用できるはずがない。それなのに、まるで社会全体をテレビの放送コードで統一するかのような、過剰な拘束・禁制が進行している。これではいわゆる３Ｋ（キツイ、キタナイ、キケン）の仕事に就こうという若者が減少し、外国人労働者が流入していく方向になっていくのは避けられない。これが人口減少社会の基底にある問題だと思う。

『飢餓同盟』の織木順一のような「人間メーター」を生み出してはならない。「人間メーター」とは、室内の密閉された環境でストレスフルな精神労働を強いられているホワイトカラーの労働者の負担を考慮し、過酷な肉体労働についているブルーカラーの労働者の身体能力の限界を考慮したものに軽減する、そうした「人間メーター」（基準）を儲けることだと思う。

安部公房といえば、『壁』、『砂の女』といったような非現実的な抽象小説が多いと思われているが、こうした現実社会への提言を行っている作品もある。彼は劇団を主宰していたから、こうした現実的な諸問題にも問題意識をもっていたようである。『飢餓同盟』は新潮文庫に収められている。是非読んでいただきたい。（了）

大阪哲学学校活動日誌（「通信」34 号発行以降）

2005 11.26.「大阪哲学学校通信」第３４号発行
11.26. 大阪の歴史と文化（２）
「巡礼（袖乞巡礼）・乞食と非人番――河内国錦部郡滝畑村の事例を中心に」
……講師・北崎豊二
12. 10.「〈心の専門家〉という装置――心理還元主義の今日的役割とそれへの批判」
……講師・小沢牧子

運動誌・研究誌

◆哲学学校の会員や参加者の中には、それぞれの関心からさまざまな市民運動や研究会に参加・運営をしておられる方があります。そうした方々が、お書きになった文章や活動紹介を兼ねて出版物などを送ってくださいます。最近は次のようなものをいただきました。会員交流の一助としてご紹介いたします。（※連絡先を知りたい方は哲学学校事務局までお問い合わせ下さい）

●『ニューズ・アソシエーティブ』第 232 号（2005/12/25）、経済研究会発行
「小泉首相の総決算　改革の掛け声の中で足元から崩れ行く日本」「日本経済　株高下での円安」「アメリカ経済と政治」ほか

【書　評】

日高恒太朗『不時着』（新人物往来社、2004.8.10. 発行）

木村　倫幸（参与）

「『生きたい』という衝動を否定されたとき、人は何を思うのか。敗戦の色濃い 1945 年夏、南海の島々に本土から沖縄を目ざして飛び立った特攻機の不時着が相次いだ……」（本書帯書きより）。

太平洋戦争末期の特攻機による攻撃については、これまで幾多の戦記、手記が書かれてきた。そして現在、われわれが特攻機ということで思い起こすのは、悲壮、純真または無謀等の言葉によって代表される受け取り方である。しかしそれらのいずれもが十分な説得力を持つとは言い難く、少なからぬ違和感が残るというのが率直な印象である。すなわち悲壮、純真とのみ特徴づければ、無謀な作戦ということが引っかかり、逆に無謀とのみ呼べばそれだけでは片付かぬものが残るのである。

本書は、この分裂した間隙にひとつの別の視点を与える。そしてこの視点は、これら両者の狭間に置き忘れられた特攻隊員たちに焦点を合わせたところから生まれる。すなわちその特攻隊員たちとは、出撃したが、何らかの理由により不時着、帰還した人びとである。

本書に掲載されている不時着・帰還兵からの聞き書きによれば、太平洋戦争末期の特攻隊員の「死の階段」は次のように分類される。

「①昭和 20 年 2 月 16 日の連合艦隊司令長官の命を受け編成された特攻隊で、特攻隊員（指名・志願）となり、所属航空隊で特攻訓練に入った者。②編成訓練は受けたが、何らかの事由により所属航空隊に残留した者。③所属航空隊を離れ、前線の特攻基地に進出、出撃待機にあった者。④出撃したが、何らかの事由で帰投（出撃帰投）、または不時着で生き延びた者。⑤出撃し、遂に帰ることのなかった未帰還特攻隊員」。

そしていわゆる戦記の著作で、特攻体験を核とした自伝本のほとんどが①～③であり、⑤は論外としても、④は皆無に等しいと指摘される。すなわち特攻隊を描き総括してきた主流の流れがここに示されており、この背景には、当時の軍隊教育による「生きて虜囚の辱め」を受けてはならないとする方針と「忠君愛国」を柱とする学校教育が、我が身を捨てて国難にあたる犠牲的精神を高揚させてきたことがある。

このような状況の中で、出撃しながら引き返してきた搭乗員たちがどのように見られてきたかは想像に難くない。「死は栄光であり、生還は恥辱」という一事のみを押しつけられている以上、基地へ帰投することは「素質の悪い臆病者」の烙印を押されることであった。そしてこの流れが、戦後も依然として続いている。

「戦争の記憶が遠ざかるにつれ、特攻隊員たちは異界の美化された物語として語られるようになった。語り部の多くは、出撃経験はもとより搭乗員としての訓練を受けたこともない、特攻隊員たちを悲劇の英雄として仰ぎ見た人たちだ。（中略）さらにたちが悪かったのは、彼らに『特攻』を命じながら戦後を生き延び『英霊たちの真情』を講演会で語ったりする元エリート士官たちの存在だった。彼らの話のなかでは生き残りの人たちを、赤穂義士の討ち入りに脱落した侍のような、『生き恥をさらしている』という負の美学

で語ることが多かった」。

この語り継がれてきたトーンに対して本書は、不時着、帰還した特攻隊員たちへの検証から、特攻隊についてはモノクロ的な語りでは言い表すことのできない諸側面を照らし出す。

例えば、多くの特攻隊員たちを要請した予科練の実態――これは土浦航空隊をはじめ全国19ヶ所に設置され、終戦時の採用人員が実に総数5万9000名にまで膨れ上がっていたこと、また日本海軍での士官と特務士官――いわゆる「キャリア組」と「ノンキャリア組」――という二極的身分制度が予科練習生の意識にまで浸透していたと同時に、その予科練習生たちの中にも、「甲種（旧制中学3年修了以上、略称・甲飛）」、「乙種（高等小学校修了以上、乙飛）」、「丙種（海軍内の一般下士官から選抜された者、丙飛）」、「特乙種（乙種の中から一定の資格ある者を採用、特乙飛）」という学歴差が存在したこと、そしてこの身分差、学歴差が、戦後の同窓会組織や記念碑建立にまで尾を引いていることが指摘される。

この意味で何よりも象徴的なのは、上記とは別に当時日本の植民地であった台湾と朝鮮の志願兵からなる「特別丙種飛行予科練習生（特丙飛）」が存在したことである。そしてこの特攻隊が存在していたことを、予科練の親睦団体が戦後も1990年代にいたるまで認めなかったという経過は、戦争責任の問題を考える上で大きな課題を突きつけている。

さらに特攻機に関して戦争末期には、十分な航空機さえ残存していない惨憺たる状況下で、単座機のみならず、複坐機では3人乗組み（九七式艦攻機）や6人乗組み、中には9人乗組みの特攻機もあったこと、また布張りの木金混合の九三式中間練習機（いわゆる赤トンボ）までもが特攻機に動員され、これが時速600キロを超える米戦闘機の間を、500キロの爆弾を抱いて時速200キロの速度で突っ込んでいくという哀れとしか言い様がない姿が語られる。

本書にはこの他、「別府湾三億円保険金殺人事件」の犯人とされた荒木虎美――大分地裁で死刑判決後、上告中に死亡――が特攻隊員であった過去との絡みで送った人生や、沖縄出身の歌手・波平暁男――『海ゆかば』を初めて歌い、『若鷲の歌』（「若い血潮の予科練の　七つボタンは桜に錨……」の歌詞）を霧島昇と競演した実力派――にまつわるエピソードなど、興味深い話も掲載されている。

特攻隊員に関して多面的な評価がなされなければならないことを指摘した本書は、ノンフィクションとしては異色の作である。そして同時にその背後に横たわる日本軍隊の本質に関わる問題点を示唆したことは、戦争責任についての議論にこれまで以上の視点を付け加えたと言えよう。

（なお本書は、2005年度の第58回日本推理作家協会賞を受賞している。）

人生について考える（7）

西山　覚（会員）

最近の社会的、支配的意識形態の一つとして心理学主義があるように思われる。心理学や精神分析についてはその重要性に異論を唱える人はほとんど存在しないように思われるが心理学主義あるいは精神分析主義についてはかなり「いかがわしいもの」として捉えている人たちは少なくないのではないだろうか。

経済学主義については人間社会の生活や個人の行動の全てを経済的要因から導き出し、あるいは還元するという欠陥があるように思われる。心理学主義や精神分析主義についても同じことが言えるように思える。つまり、人間社会の生活や個人の行動要因を心理的要因、幼少時に形成された心理的要因 (無意識) により説明し、人間の全ての行動原因をそれに還元しようという点において致命的な欠陥を持っていると言わなければならない。

人間の行動様式や生活様式を根本的に規定する原理を無意識や自覚的意識や経験というものにだけ限定してはならない。つまり、人間を「意識的存在」以上のものとして、物質的相互関係に時代的歴史的に制約された総体としてまずは捉えておく必要がある。

「敵対的関係」が物質的に実在するがゆえに「敵対的意識」が存在するのであって、決してその逆ではないのである。「利害の対立」が物質的に実在するがゆえに「敵対的関係」というものが意識されるのであって、その逆ではないのである。

確かに、「支配関係」にあるということと「支配する過程」とは区別しなければならない、しかし、それは単なる意識の問題として存在するのではないのである。

20 世紀の社会主義の実践に絶望してマルクスとフロイトをドッキングさせて総合しようという試みがいろんな人たちによってなされているが、これは折衷主義であり、失敗する運命にあると言わなければならない。

フロイトの理論は一般的に言うならば正当なものである。ただし、フロイトの研究の対象である家族関係の家族が市民家族であるということに留意しなければならない。それは家族の、あるいは親子関係の超歴史的な普遍的形態ではないのである。つまり、それは止揚されなければならない形態として存在しているのであって、決して固定されたものではないということである。

また、フロイトの理論においてはコミュニケーション的契機が欠落しているとも言わなければならないであろう。つまり、相互間の了解を志向する行為として、強制された相互主観性ではなく、お互いが納得のいく状態、同意の形成過程としてのコミュニケーション的行為という視点が欠如しているように思われるのである。

第一次世界大戦を経験した後、1939 年に、今、又ヨーロッパでのファシズムの台頭を目の当たりにしながら死んでいったフロイトは、ついに人類の希望を見出すことなくその生涯を終えたのである。

世界恐慌を発端として、当時、ヨーロッパで没落しつつあった中産階級と大衆はファシズムの主張する強力なナショナリズム、国家主義を支持し、盲従していったのであった。

軽薄にして野蛮な、文化的レベルの低い大衆は真の意味での変革の担い手にはなれず、人に

よる人の支配を、支配 - 従属関係の廃止をめざす社会主義の意味を理解できず、それを否定したのであった。民衆は愚劣にして愚かな存在であるがゆえに人間は自らを解放することができない、人間の解放は不可能である。これが所謂、フロイトのペシミズムである。

おそらく、フロイトには人間を歴史的に考察するという視点がなかったのであろう。眼前の現実が全てであり、フロイトにとって現実とは固定されたものなのである。

心理学主義、精神分析主義の本質は現実への「適応」であって「変革」ではない。それは必然的に「現状維持」と「現状肯定」という方向へ帰結する。人間とは矛盾した存在であるがゆえに不安な存在、不安定な存在なのである。現実というものを肯定的な面と否定的な面との統一体として捉えなければならない。力学的、機械論的世界観であってはならない。

人間は歴史性において、「一定の範囲内」ではあるが自らの努力によって自らの運命を変えることができる自由な存在である。社会的にして自由な存在、それが人間なのである。

一定の範囲内における自由の実現とは自らの歴史的使命を自覚し、「実践と反省の往復運動」を行いながら「過程」に内在するということである。理念を保持し続けながらアソシエーションを実践する、「過程」を生きるということである。

歴史的に「過程」を生きるということは常に時代が提起する最優先の課題と向き合うということであり「人間たちは生活をする」というテーゼもこういう連関において理解しなければならない。

しかしながら、抽象的な言葉や理論や教義というものに安住することは今、現在の生活に安住しているということであって情熱を失うということであり、人間の本性に反することのように思える。生活において痛みや苦しみを感じていない人、幸福な人というのは発展性のない人であり、完結した人でもある。

人間の本性である社会性や自由という観念も自らの痛みや苦しみ、欠乏を通して自覚されてくる。存在感とは痛みや苦しみや欠乏を通して現実のものとなる。

人間的存在感とは「社会的諸関係の総体」であり、まずは労働を通じて、生産活動を通して形成されてくるのであり、そのような過程を経験することにより「他者の受容」という観念が成立する。しかしながら、生産活動とは協業であり、労働においてすでに「他者の受容」は成立しているのである。たとえ外からの強制的力によって束ねられたものであったとしても資本主義的生産諸関係において個人は社会化されると同時に個別化され「私」という意識も成立する。この関係において人間の欲望が解放され自然や人間という存在は「物件化」され、「在る」という関係の他に「持つ」という二重の関係が発生してくる。

発生史的には「剰余価値」の生産が行われるようになって「主と奴」の関係が成立するが、いかなる媒介、いかなる過程があったのかは知ることができない。ひとつ、ひとつの結節点、結果、媒介の揚棄としての結果だけをみていただけでは人間の実践、歴史的実践というものは理解できない。依然として「過去には歴史があったが、現在は自然があるのみ」という観点しか出てこない。人間の実践を、歴史の原動力を人間関係の合成力として、ベクトルとして理解したエンゲルスの捉え方では、人間の実践の「動機」を解明することは出来ない。「先天的なもの」と「後天的なもの」の関係の解決が出来ない。

観念論者や不合理主義者にとって先天的なものや物質への働きかけというのは「闇の衝動」、以外のなにものでもないのである。動機は依然として「ブラックボックス」なのである。

「心の物質性」という観点から見た場合、物質的なものというのは徹底的に固くて重たいものなのである。頭の中でだけでしか否定しえない

ものなのである。

「五感の形成は世界史の労働」と規定されているように人間の感性も歴史的対象物によって規定されている。現実存在としての対象としての自然や人間も媒介の揚棄として存在している。主体と客体の関係も常に相対的に動いて変化している。対象を変化させることにより主体も変化する。この「過程」が延々と続いていく。しかしながら、お互いに、相互的に変化しながらも「後戻り不可能な意識」というものも形成されていく。新たな「理念」が歴史的に形成されていく。

意識の根拠、物質的装置を対象的に創出しながら、主体の位置がズレることにより、主体の役割が変化することにより、新たな主体性が意識において自覚されてくる。

歴史、生活過程における普遍的形態は、既知／未知—既に知られているものと知られていないもの—完成／未完—完成されたものと未完のもの—というものである。しかし、これだけを言ってもなにも言ったことにはならない。今の自分と今の時代との関係、あり方を自覚しなければならない。

「何をなすべきか」「何ができるのか」「何を望んでもいいのか」、この実践的問いに答えを見出すためにはまたしても感性的実践が必要なのである。実践を抜きにして答えを見出すことは出来ない。正確な位置関係を知るためには今の位置からズレなければならない。

しかし、今の位置からズレるということは、今の位置に不満を抱くということであり、反発するということであり、そして、何よりも今現在、苦悩しているということが前提条件になる。

「知性」重視の立場においては、「世界とはなにか」「存在とはなにか」という方向へ向かうのであるが、そして、この問いは世界や存在と自分自身を切り結ぼうとする実践的な問いを立てる上での前提条件になっているのであるが、しかし、その問いを発している間もずっと実践的な関心、価値判定が行われているということを我々は忘れてはならないのである。つまり、「実践と反省の往復運動」とはそういうものなのである。

「世界」「物質」「存在」と「言葉」の関係においてもみておきたい。

「言葉とは物質的なものが翻訳されたもの」という表現があるが、この定義は非常に明快でわかりやすい。「言葉」を物質の単なる反映というように理解してはならない。

人と人との関係を、人間の本質をコミュニケーション行為に求めること。コミュニケーション行為を人間の生命の発露として位置づけること。感性的実践として、相互的振る舞いとして理解することが必要である。

「言葉」は世界、存在、物質を否定するものであり、その動きを止めるものである。「言葉」は複雑なものを簡単な規定に抽象化して、枠のなかに閉じ込める働きを持っている。

「言葉」は有限で相対的なものを無限で絶対的なものに置き換えようとする。

しかしながら、普遍的なもの、無限で絶対的なもの(言葉、言葉の連鎖、理論)から特殊なもの、有限で相対的なものを引き出すことは出来ない。不断に「世界」を「言葉」として翻訳しなくては「言葉」はそれ自体として「自立」してしまい「完結」してしまう。

かくして「言葉」は有限なものとして孤立することにより、翻訳の機能が停止してしまうのである。それが所謂「教条」と呼ばれるものなのである。「言葉」はその機能の本質上「死んだもの」である。又、「言葉」を道具として見ようという考えもある。

大切なことは、「言葉」の機能、役割を理解することであり、「言葉」の有効性と限界を理解することなのである。「言葉」の位置づけさえきっちりできていれば「言葉」に対して過大な期待はしなくなるものである。すなわち、「知性」の

役割、位置づけを理解すること、「知性」の有効性と限界を理解すること、これが必要なのである。

そして、人間の使用する「言葉」は人間の本質を「外化」し、対立—必ずしも敵対するものではなく、一定の条件の下で人間を抑圧する道具ではある—する (させる) ものである。

しかしながら、「言葉」を使用するのはあくまで人間である。そして、人間は「言葉」をある特殊な実践的な意図を持って使用するのである。しかも、それは常に背景として人と人との利害関係を前提としている。それは常に権利関係を前提としている。

イデオロギーとしての「言葉」も常に人間の利害関係と法的な権利関係を前提としているのである。

はたして、人間の利害関係から切り離された「中立」の「言葉」というのは存在しうるのであろうか。少なくとも、人間の実践的関心と無関係に「言葉」が成立するとは思えない。

「言葉」は又、「意味」であるが、これは人間が世界を獲得する形式であり仕方なのである。そして、「言葉」は他の人間に「生命」を吹き込むものでもある。要するに、「言葉」は普遍的存在者である人間の本性を担保するものであり、保障するものなのである。

しかし、「言葉」は人間存在の全てを表現したり、伝達することはできない。「存在」「世界」「物質」とは、「言葉」によって表現された「以上の存在」なのである。人間は「言葉」によって限りなく「世界」に接近し、限りなく本質としての「世界」を汲み上げることはできるが、「世界」という海を汲みつくすことは、永遠に不可能なのである。

「あきらめ」や「絶望」という観念は人間の幸、不幸と密接な関係があるように思える。

人間の「進歩」や「自由」の実現という観念と「幸福」という観念は関係があるように思えるが、同時に相互作用があることもみておかなければならない。

「自然」と「人間」との関係、「人間」と「人間」との関係、「人間」と「人間」の関係を介しての「自然」との関係。それぞれに歴史的媒介の程度による無限の交互作用がある。

しかし、このような抽象的なことを指摘したところで何も言ったことにはならない。

人間は幸福や不幸ということを理解する能力があるけれども、動物にそのような能力はあるのだろうか。動物には快や不快、苦しみといった感情を感じる能力はあっても自らを対象化する能力はないのではないだろうか。

おそらく、幸福や不幸という心のありようは人間に固有のものなのであろう。

「幸福」と「不幸」は表裏一体の関係にあるので、交互作用があると言わなければならない。幸福は不幸となり、不幸は幸福になる。かくしてこのような過程が延々と続いていく。

「自覚」ということ、「問題の自覚」というのは「主と奴の関係」で言うならば、それは支配を被っている者、「構成体」の「論理」に「苦しみ」を強いられている人たちにおいて「発生」する。「構成体」の「論理」に肯定的な者、利益を感じている者は「構成体」の「論理」に「矛盾」を感じないがゆえに「無自覚」であり、「問題」が「自覚」されない者であり、したがって、「問う」ということを知らない人たちである。社会的位置関係、支配関係において盲目なのであり、「問う」という「衝動」を持たない人たちなのである。しかしながら、社会的位置関係と社会的意識とは、必ずしも一意対応しないものである。

人間の「社会的存在が意識を規定する」ということは、人間が社会的意識において社会的位置関係と常に一意対応するということを意味するものではない。生活諸過程というのは極めて複雑に入り組んでいて、しかも交互に作用しあっているのである。

歴史において重要な概念は、未熟な状態から成熟した状態への成長ということである。しかしながら、人間の歴史のどの段階を取り上げて考察してみても未熟な要素と成熟した要素、常に、その二つの要素は含まれている。異なるのはその形態だけである。完全に成長しきった状態というものはないのである。在るのは未熟な状態から成熟した状態へと成長していく不断の「過程」である。このような「過程」が延々と続いていくのである。

この「過程」のなかに様々な「目的」が原動力として、モメントとして存在するのである。「目的」はある、ただし、モメントとしてあるのである。不惑としての人生を生きるためには理念が必要なのであり、「目的」が必要なのである。人間はそのような「過程」を「言葉」を介して実現していく。その「過程」は又、有—成—無という過程であり、無—成—有という過程でもある。「言葉」においては「有る」と同時に「無い」、「無い」と同時に「有る」と言わなければならないし、事実そのようなものとして「世界」は在る。「矛盾」こそは「世界」の変化、運動の原動力なのである。

しかしながら、人間にとって最大の「関心事」は当面の現実、当面の人間関係である。何を選択し、何を決断するのか、常に即答を強いられている。つまり、意志において人間は有限存在であることを自覚させられているのである。有限であるということは社会的にして自由な存在である人間にとっては苦痛なことであるが、生きるということはもともとそういうことなのである。

「国家の本質は強制であり、政治の本質は同意である」と言われる。今日、「国家の社会への再吸収」がテーマになりつつある。「政党の衰退」ということも指摘されている。

「代表制」、「代行主義」の限界も表面化している。

ソ連のペレストロイカ、「上からの改革」も最終的に失敗に終わった。しかし、「上からの改革」というのはそもそも可能なのかどうかということを吟味しなければならない。

「上からの改革」とはプラトンの「哲人政治」と同じく、エリート主義であると断定せざるを得ない。エリートや官僚や組織の代表者による「上からの改革」は事柄の本質上、エリートや官僚や組織の代表者の特権や既得権に配慮しながらの「改革」であるため、決して抜本的な改革に到ることはない。

抜本的な「改革」は民衆のアソシエーション活動を通して、民衆自身の政治的力量や自己統治能力を向上させることによって成就することができるのである。

「構成体」のシステムの「変革」によってしか自己実現、自己の利害を貫徹することができない勢力が担い手となる「運動」が必要なのである。圧倒的多数の民衆による自己統治運動が「代表制」や「代行主義」に取って変わる必要性が自覚されなければならない。

権威主義や経済学主義、心理学主義、精神分析主義というのは支配階級のためのイデオロギーなのであって、現代における「宗教的役割」を演じている。

人々の「宗教的心情」を巧みに操作するという点においては露骨な既成宗教よりも一層たちの悪いイデオロギーなのである。一見したところ、科学的な装いをしている為、システムや支配層の利害の合理化を正当なものであるかのように錯覚させている点において非常に悪質なものだと断ぜざるをえない。「権威主義」も「経済学主義」、「心理学主義」、「精神分析主義」も帰するところは「現状維持」と「現状肯定」なのであって、利害関係の変更や人民による自己統治についてはこれを明確に否定している。アソシエーション的実践についてもその意義を認めようとはしないし、理解することもできないのである。なお現代は「哲学」ではなく「個別科

学」の時代であるが「科学主義」というのもれっきとしたイデオロギーであることを押さえておく必要がある。また、「科学的社会主義」という言葉があるが、これはエンゲルスによって発明された概念であって、マルクスとは無縁の概念であることを確認しておく必要がある。マルクスの立場は「科学的社会主義」ではない。

グローバリズムによって地球の地域の歴史は「世界史」へと転化した。人類の生活が同じ波長で動くようになってきたのである。今日では、市場原理が世界を支配するようになっている。ある意味においては人類の歴史は19世紀中葉の時代、1848年の地点まで後退したかのように見える。福祉政策のない市場原理至上主義の時代である。

しかしながら、市場原理が世界を覆いつくした今日の段階において資本主義はピークを迎えたのである。「外部」を不断に自己の「論理」に組み込み、「内部化」することによって「近代世界システム」は勢力の拡張を図り、成長してきた。今後、地球上を覆いつくしてしまった「近代世界システム」にはいかなる「外部」が存在するのであろうか。市場をどのようにして確保するのであろうか。

今、人類は150年前と同じような状況に置かれることになってしまった。しかしながら、我々にはウォーラスティンが指摘するように150年間の実践による経験がと知恵があることを忘れてはならない。

理念の実現というのは端緒、原初的形態においては非常に粗野なものである。これはアソシエーション的実践においても該当するように思える。

「世界社会フォーラム」の実験については非常に粗野な面があるということは否定できない現実である。しかし、可能性という面から見た場合にはどうであろうか。

失敗や挫折を恐れていたのではいかなる「運動」も展開することは出来ない。「世界社会フォーラム」における様々な活動、集会においてはかなりの数の人々を動員することに成功している。世界の国々における先進的な人々にもその活動は注目されるようになった。

しかし、単に民衆をどれだけ動員することができたか、ということのみを評価の対象にすることはできない。「運動」の理念もまた吟味されなければならないのである。

にもかかわらず、特定の権威を振りかざしてはいないこと、特定の党派に従属させようとしないこと、従属しないこと、言論の自由を保障していること、差別をしないこと、抽象的ではあるが民主主義の原則、自由、平等、博愛などの理念を尊重していること、貧困の撲滅を目指していること、大きな意味での人間の解放をテーマにしているように見えること、などを考えた場合、政治的なものをどのように考えているかとか、疑問に思うことがあったり、未熟な要素があったとしても従来型の市民運動と比較した場合、積極的な可能性を秘めているという点については一歩前進しているように思える。しかし、この「運動」もまだまだこれからというのが私の印象である。これから様々な「下からの改革」を目指した民衆の多くの「運動」が展開していくことが予想される。それは単なる予想ではなくて「実在的可能性」として存在するということである。

「世界社会フォーラム」はアソシエーション的実践の一つの形態なのであり、多くの可能性を秘めた運動なのである。

【『人間論のファンタジー』つづき】

エデンの園の人間論

やすい　ゆたか（会員、講師）

土の塵神の姿に作られき
命の息得てアダム生まれぬ

陽一の遺骸は砂漠に捨てられ砂嵐にあって埋まってしまった。それからどれだけ時が過ぎ去ったか、死んでいる筈の陽一には分かるすべもない。砂の中で体は分解して土に返った。陽一は湿り気を感じ、また元の身体に戻っていった、そして風が吹いてきて意識が甦った。陽一の父が手をとって起こした。「お父さんどうしてここにいるの」と言いたかったが、声がでない。父は言った、「素晴らしい、俺にそっくりだ。土(アダマ)の塵でつくったからアダムと名づけよう。」そして父はアダムを「エデンの園」に連れて行った。

中央の命と知恵の二つ木の
実にふれまじき命惜しくば

エデンの園は地上における神のエリアと考えていいのかもしれない。エデンの園にはたくさんの種類の木が茂り、それぞれの木には緑の葉が生い茂り、花が咲き、実をつけているものもたくさんある。園の中央に命の木と善悪の知識の木があった。この二つ木こそが神の実体だと捉えることもできる。つまり「生命」と「ロゴス(論理)」が神の二大要素なのである。「この二つの木からは木の実をとって食べてはいけない。食べたら死んでしまうよ。他の木ならいくらとってもいいからね。」神に触れたら死ぬという発想である。アダムと呼ばれている陽一は、「はい、分かりました、ありがとう」と言おうとするのだが、言葉にならない。「あーあー」とおらんでいるだけだった。父の姿をした神は「話したがっているね、話せるようにしてあげよう」と言うと、話せるようになった。その代わり陽一の記憶は消されてしまっていた。

慰めに作られし獣アダム見て
名口ずさめりな心のままに

エデンの園にはアダム以外の獣はいなかった。アダムは寂しそうにしていたので、神は鳥や獣を作ってアダムのところに連れてきた。いい相棒になるだろうと考えたのだ。アダムはそれらの姿や特徴から次々と名づけを行った。まあ犬を見て、ワンワン、キリンを見てのっぽさんというようなもので幼児語のようなものだ。それを父なる神は大変喜ばれた。どうも神は天使たちにアダムを自慢し、アダムの方が天使より尊いと言い出したらしい。それで天使の中でイブリースのように神に逆らうものも出たという話があるが、それはイスラムの『クルアーン』の世界である。

神に似し人は支配を任されぬ
欲に駆られて命絶やすな

神はアダムが自分に似ていることと、名づけを行い言語能力があるということで、地上の支配権を与えるとアダムに言った。人はこうして自分が地上を好きなように支配していいのだと思い込み、森の木を気ままに伐採したり、森を耕地にするために焼き払ったりしたのである。また獣が絶滅するまで狩をしたりしても平気になったのだ。陽一はアダムになりきっていたか

ら、この傲慢が人間と自然の断絶につながり、大いなる生命を見失うことについての問題意識はまるでなかった。

吾が骨のうちより出し女 (ひと) ならば
吾に帰れや吾が骨の骨

獣の中に人の助手になるようないい相棒は見当たらなかった。アダムは獣たちを見下していたのだ。あくまで人間に危害を加えるか、役に立つか、慰め物になるかの自己中心の捉え方しかできない。そこで父なる神は、アダムを眠らせてそのあばら骨を一本とって女を作られた。

自分の骨から作られた女は、自分の体の一部のようにいとおしかった。この世に自分にとって自分自身のように思えるものは何もいない。はげしい孤独感に囚われていただけに、女を授かった喜びはひとしおだった。「ついにこれこそ私の骨の骨。私の肉の肉。男から作られたので、男からつまり女と呼ぼう。」男はイシュなので、女は男からつまりイシューなのだ。もっともこれはヘブライ語の話だが。アダムは女に対して、自分から生まれてきた自分の子供のような意識を持っていた。もちろん最初の人だから妻と娘の区別ができるわけがないが。

元々、男女の性欲には一つの体から分かれたもの同士が、一つに戻ろうとして合体したい気持ちがあるのだ。だから近親相姦が異常なように考えるのは性の根源を考える限り的を得ていない。最初の男にとって最初の女は自分の肉体から生まれた娘でもあるのだから。つまりアダム・エバコンプレックスで父と娘の間の潜在的な性衝動が説明できるのだ。

このイシューがエバと呼ばれるのは、彼女が子供を生むからである。エバというのは「命」という意味なのだ。実はこのエバに扮しているのが、このファンタジーでは智子なのだ。陽一はついに自分が追い求めていた智子を得たのである。しかし自分が陽一であることも、相手がクラスメートの智子であることも思い出せない。でも抑えきれない心の底からの熱い熱い思いがエバになっている智子へと注がれたのである。

アンニュイのエデンの園の昼下がり
行き場失いとぐろ巻く蛇

エデンの園は時間が止まっているようなものだ。常に食料は豊富で、天敵もいない、野菜や草花の栽培はしていたらしいが、主食は果物である。いくらでも食べ放題だ。何の苦労もなく、勤労の意識もなく、のんびり暮らしていたのである。アダムとエバは夫婦として充実した性生活を送っていたけれど、やがて倦怠が訪れる。エデンの園ではすべてが同じことの繰り返しだ。果物も食べ飽きてしまった。

なまけものという猿は、アマゾンの豊な自然と天敵のいない陽気暮らしでのんびりしていて、極めてスローモーションな動きをしている。お陰でエネルギーを消費しないので、欲望を最小限にして幸福に暮らしているらしい。ところがアダムとエバは言語を持ち、想像力を働かせることができるので、欲望を肥大化させる。でもエデンの園は全く変化がない。だから二人の欲望は行き場がなくなって、欲望が二人の体から外に出て対象化され蛇の形をとったのである。

一応神によって造られた野の生き物には入っているが、蛇がどうして生まれたのか『創世記』では分からない。おそらくエデンの園に迷い込んだ蛇は、二人のフラストレーションの空気に当てられて、欲望の権化になったのかもしれない。蛇は獣なのに二人に話しかけているが、それは蛇だけずば抜けて賢いということだ。それで思い当たるのが、禁断の善悪を知る知恵の木

である。その木の実を蛇はお先にいただいているのだ。神は蛇が迷い込んだのを気づかなかったので、蛇に禁断の木の実の説明はしていないから、禁止されているとは知らずに食べてしまったのである。それで急に賢くなってしまったらしい。ところが女に聞くとどうも園の中央の木は食べたら死ぬぞといわれていたらしいのである。ところが蛇は食べて確かに賢くはなったけれど、ぴんぴんしている。

「決して死ぬことはない。それを食べると、目が開け、神のように善悪を知るものとなることを神はご存知なのだ」と蛇は女に教えたのである。これは嘘をついたのでも誘惑したのでもない、自分の体験を教えただけである。この蛇と女の対話を捉えて、女は蛇に性的に誘惑されたと見るものもいるが、蛇の方から一方的に誘惑したとする根拠は全くない。女の方から初な蛇を誘ったとも考えられるのだ。だとすると蛇とサタンを同一視するなどもってのほかである。

蛇は元々アダムとエバの欲望がアンニュイの中で生き物の姿をとったもので、アダムとエバ自身の欲望の化身なのだ。それはうがった見方にしても、蛇の方が二人より先に生まれたとする根拠はない。楽園に迷い込んだ蛇を退屈していた二人が遊び仲間にしたとも解釈できる。当時はまだ夫婦観念やそれに伴う貞操観念などは全くなかったのだから、仲良くなればくっついたり離れたりすることになる。もちろん嫉妬感情もなかっただろう。ただ蛇はいったんまぐわうと何日も離れないというから、アダムが怒り出したかもしれない。

それにアダムといっても「人間論の穴」の上村 陽一だし、相手のエバは彼が追ってきた三輪智子である。そしてなんと蛇に扮しているのはあの榊周次なのだ。だから無意識のうちに蛇をライバル視し、疎ましく思う気持ちが昂じてきて時々機嫌を悪くし蛇を冷たくあしらうようになる。するとエバである智子は、アダムのそういう態度が気に入らないので、余計に蛇に優しくしようとする。それで陽一は蛇とあまり口を聴かなくなったのだ。

すべては楽園の午後である。蛇が善悪の知恵の木の実を食べて、賢くなり、仲間入りをして、食べても死なないと教えた。それで神から禁じられていた木の実を食べてみたいという衝動が抑え切れなくなったのだ。まだ食べたことのない知恵の木の実、どんなにおいしいだろう、それに自分で物事の善悪を判断できる力ができるというのだ。これまでは、ただ与えられたものを食べ、神の言われるままに行動すればそれでよかったのだけれど、善悪を知ると、自分が何をなすべきか判断でき、自分から、自分の意思で行動できるのだという。まったく新しい存在に生まれ変わるのだ。だからそのためにたとえ死ぬようなことがあっても、木の実を食べてみたいという思いが膨らんでくる 。それは胸が苦しくなるほどである。それに死ぬぞという神の脅迫は、それほど効き目がなかったのかもしれない。何しろまだだれも死んだものがいないので、死という観念すら理解できなかったのだ。

女の方が新しいもの珍しいものへの好奇心は強く、変身したいという願望が強いのかもしれない。「この木の実が言ってるわ。『私を食べて、とても甘くておいしわよ。あら何を恐れてるの、賢くなりたくないのかしら』て、もう我慢できない。」女が取ってアダムにも与えた。そしてさっさと食べ、アダムにも勧めた。「ウーン、とっても甘くておいしいわ。大丈夫よ、どうして食べないの。」そういわれると食べないのは臆病者みたいである。アダムにしても新しい味への好奇心は爆発しそうなくらい膨らんだ風船球みたいなものだったので、食べずにはおれなくなって食べてしまった。

善悪の知恵の木の実を口にして
覆い隠せリ裸の恥じらい

さて二人は賢くなって、物事の判断がつくようになった。これを「目が開いた」と「創世記」では書いているが、もちろんそれ以前は盲目だったわけではない。道徳的に物事をみる目が開いたということなのである。その最初のことが裸の恥じらいだ。他の動物の場合は、雌の発情が醸し出すフェロモンに刺激されて雄も発情する。だからごく限られた時間である。ところが人間の場合は、女の発情と無関係に男は発情するので、女がその気になってないときも男のものがしょっちゅう勃起していかにも目障りになる。それでイチジクの葉をつけて隠してくれと女が要求したのだろう。

「あら、またおっ起てて、いちいち相手になってられないわ、目障りだからしまっといてよ。しまうところがないのなら、イチジクの葉っぱでもつけて隠しておいて。」売り言葉に買い言葉である。「おまえのが露出してるから、つい誘われているような気になって、勝手に膨らんでしまうんだよ。お前の方こそ、イチジクの葉っぱをつけて隠しておきなさい。」

ともかく神から与えられたものでない最初のタブーが性的なものであったということは、人間の本質にとって性的なことが非常に大きなウエイトを占めているということを意味している。神に禁断の木の実を食べたことが露見してしまったのも、裸が恥ずかしかったからである。神がエデンの園を歩いているのを察知して二人は隠れた。「どこにいるのだ」とたずねられて、アダムは「神の足音がするので、恐ろしくなって隠れています。だって、私は裸ですから。」神は怪訝な表情になって「お前が裸だと誰かに言われたのか。それとも取って食べてはいけないといっておいた木の実を食べてしまったのか」と詰問した。これで万事休すである。

神に従うか従わないか、神との約束を守るか守らないか、それが最大の基準である。だから最も重大なことは木の実を食べたかどうかではないのだ。神の命令に背いたことが罪なのである。そしてそれは最も重い罪を犯したことになる。その際神の側の管理責任とか注意義務を果たしていなかったとか、二人を倦怠から罪に堕ちやすい状況においていたとか、そういうことは一切考慮されない。あくまでも神は裁く側にあり、裁かれる側ではないのである。

食べないと遊んでやらぬと言われしか
女がなどとふるはあさまし

こういう場合つい言い訳をしたくなる。責任転嫁をしてできるだけ自分の罪を軽くしてもらいたいなるものだ。しかしそれはかえって見苦しい。「あなたが私と共にいるようにしてくださった女が、木から取って与えたので、食べました。」こんな言い訳してもいいわけ。これは典型的な責任転嫁で政治家が収賄の疑いをかけられたときに、「妻が」とか「秘書が」とかわそうとするのと同じである。何も食べなければもう遊んでやらないと言われたわけでもない。自分が食べたかったから食べたのである。己が罪を犯していながら、それを女のせいにするのは全くもって恥知らずである。

しかし〈取ったのは女で、私ではない〉という理屈は通るだろうか、細切れに事実の流れをみるとそう解釈できないこともない。しかしこれも却下である。牛肉を好んで食べている人が、〈牛を殺した屠殺業者であって自分ではない〉と牛殺しを否認するのと同じである。あるいは紙や木材を大量に使っている日本人が東南アジアの熱帯雨林の破壊の進行に対して、〈自分は木

を伐採したことがない〉というのと同じである。人間の行為というものは、つながっていて肉を食べることは牛を殺すことにも関わっているのである。だから木の実を食べたら木の実を取ったことにも共犯なのである。

女も同様の責任転嫁をする。「蛇がだましたので食べてしまいました。」蛇の名誉のために重ねて言おう、蛇はだましていない。というより蛇がだましたという根拠は『創世記』に何も書かれていない。蛇は何も罪に当たるようなこともしていないのである。禁断の木の実であることも知らされていなかった。だから罪刑法定主義の原則から言えば、蛇の罪は問えない。後にハムラビ法典では法は文字で示されたが、それ以前は法で罪を問うには周知させる作業が必要である。

何ゆえにサタンの化身に落とされし、
神なりし石のライバルは蛇

だから蛇にはいいわけも抗弁もさせずに蛇からいきなり実刑判決だ。よほど神は蛇には怨みがあるらしい。というのがフェティシズムつまり物神信仰では蛇は石とならんでフェティシュの代表格なのである。神は絶対的存在であり、あらゆる相対的な事物とは絶対的に自分を区別しているから、物質的存在ではありえないとする超越神論はフェティシズムを最も敵視していたのだ。だから、蛇はどうしても悪者にされてしまう。それにヘブライズムもかつてはフェティシズムだった。元々ヤハウェは火山や石だったといわれている。つまり有力なライバルだったわけだ。

「お前はあらゆる家畜や獣の中で一番の呪われものだ。お前は生涯這いずり廻って塵を食らえ。蛇と女は互いに敵意を抱くのだ。女はお前を毛嫌いして、お前の頭を砕こうとし、お前は女のかかとにかみつこうとするようになる 。」神はこう判決したそうだ。蛇は抗弁しようとしたけれど、神から姿を変えられ、声がでなくなってしまったという。縄のような姿になり、地を這いまわるしかできなくなったのだ。でも蛇にすればこの解釈には異議が有るだろう。だって蛇は地面を這い廻ったり、塵を食べるためにあんな姿に進化したのである。それを罪に対して与えた神の罰のように言われたのだから、名誉毀損である。

次に女に判決が下る「お前の孕みの苦しみを大きくしてやろう。お前は苦しんで子を産むのだ。お前は男を求め、男は女を支配する。」この『創世記』の言葉はその後の男による女支配を宗教の権威の下で正当化する大きな役割を果たしている。まさしく神の命令に率先して背いた報いで、女はお産でも苦しみ、男に支配される定めだということになってしまった。ユダヤ教やキリスト教を信仰している限り、性差別には聖典の上では反対できないことになるのだ。もちろん近代になって男女平等になれば、「創世記」もその時代の社会的制約の下で書かれたものだから、必ずしも現代人はそのまま信仰することはないということにはなっているが。ともかく『バイブル』は男が書いたものである。それを女にも信仰させているわけだ。アダムになっている陽一は、陽一であることを意識的にはすっかり忘れていたのに、ふと宗教が性差別をイデオロギー面で果たしている役割が大であることを実感した。

労働は罪の報いか禁断の
苦役は続けり塵となるまで

いよいよ男アダムへの判決である。男への判決ということは女は男の添え物のような意識で書かれているので、人間への判決である。これがヘブライズムの人間観の核心といわれている

ところだ。「お前は女の声に従い、とって食べるなと命じた木から食べた。お前の故に土は呪われるものになった。お前は、生涯食べ物を得ようと苦しむ。お前に対して土は茨とあざみを生えいでさせる、野の草を食べようとするお前に。お前は顔に汗を流してパンを得る。土に返るときまで、お前がそこから取られた土に。塵にすぎないお前は塵に返る。」

「雌鳥が鳴いたら国が滅びる」というのは古代中国の格言だが、女は感情の動物であり、理性的な判断が苦手である。女の言うとおりにすると情実で物事が決められるので、君主は寵愛している女に政治に口出しをさせてはならないということことわざである。女性が理性面で活躍できないような地位に差別しておいて、女性は感情的だという言い方である。ともかく「原始女性は太陽であった」のだが、歴史時代に入って女は半人前で感情の動物で、男に支配されなければならないことになってしまったのである。

人が神の命令に背いたので土は呪われたという。神に背く罪によって災いが起きる。天変地異が起こるのである。土も呪われて雑草ばかり生えて、小麦や野菜などが実らないのだ。道徳的な人の行いと自然現象を結びつける。『新約聖書』になると罪がはびこると悪霊が活躍し、それが原因で疫病がはやったりする。つまり神に従っていれば豊な自然の実りがあまり労せずしてもたらされるのだけれど、神に背いて罪に堕ちれば、苦労して働かなければならない。それも一生死ぬまで働きずくめに働いても貧しい暮らしから脱却できないのである。それは貧しくて苦労しているのは本人の罪のせいだといっているようにも受け取れる。逆に豊で楽をしているのは神に従っているからなのか。

早とちりして『バイブル』を単純な勧善懲悪や神に従えば救われるというだけの単細胞的な書物と考えてはならない。いくら神に忠実でも一生報われない者もいれば、ひどい罪を犯しても死ぬまで栄華を極める手合いもいるのである。それでも神を信じ、神に従いなさいと説くのが『バイブル』なのである。

ともかく労働は罪の報いとして捉えられている。終身懲役刑のようなものである。近代西洋の人間論で労働本質論があるが、それが労働を人の罪に対して課す神の与えた懲役刑だという暗い労働観と結びつくと、人間は罪を犯したために、死ぬまで懲役を科せられている囚人だということになりかねない。

労働を苦役と捉えることによって、その犠牲によって作り出された生産物やサービスを手に入れようとするなら、それと同等の苦役を提供してそれに報いなければならないことになる。その犠牲の量が価値なのである。等量の価値が交換される物には含まれていることになる。それが商品交換の論理である。共同体を超えて交易が広がっていくのは商品交換を通してであるから、文明の基礎をなしているともいえる。

もちろん労働には苦役の面だけではない。予め構想していたイデア (理念) に従って物を作り出すという、理念の自己実現という意味がある。これは自己の能力の発現なのだから、苦労を伴うとしても、とても楽しいことのはずである。それに目的意識的に対象を変革する労働は、人間の特長だといわれている。他の動物の活動は、生理的に慣習化した適応行動にとどまるのだ。それだけに労働は人間の本領発揮として、人間の第一の欲求だという捉え方もできる。だから「創世記」の苦役的労働観だけでは一面的である。

労働は自然に還る勤行か
吹く秋風に胸を突き出す

アダムはエデンの東に追放され、そこで土と格闘して働きづめに働いた。しかし作物はなかなか実らず、一日のパンを得ることの困難を全身で感じ取っていた。来る日も来る日も土に向かっていた。始めの何年かは苦役としか感じられなかったが、そうした土との格闘が彼自身の肉体に浸み込んで、そうしていることが当たり前になり、それを苦痛として厭う自己が希薄になっていった。むしろ彼の意識は大地自身の意識となり、種から芽を吹き、葉を出し、花と咲き、実を結ぶ麦それ自身と同化したのだ。枯れて大地にかえると、秋風の吹く大地自身の意識に帰っていた。

「塵に過ぎないお前は塵に返る」というのは実はそういう意味なのかもしれない。アダムは神にその言葉を言われたとき、人は元々土なのだから、死んだら土に返ってそれでおしまいだという意味だと思っていた。そういう意味もあるにしても、人間は土との格闘によって、土を人間のものにし、花咲かせ実を実らせる。そして花咲かせ実を実らせた土を自分自身として捉え返すこともできるのである。この土との対立を乗り越えて土と一体化するための労苦が宗教的な勤行としての労働なのである。エデンの東に追放されたのは、罪の報いとしての罰であるが、人間は罪を犯し、その罰を受けることで、自己を狭い主観性から解放して、大いなる生命に目覚めることができる存在なのである。

長い時間がこの勤行には必要である。榊周次は一年、十年、百年という時間の長さを人間論の穴に落ち込んだアスリートにほんの数秒で体感させるという技術を開発しなければならないのだが、それはなかなか難しい。上村 陽一は土にまみれて苦しみぬいたあげく、一面の麦を実ったのを見て歓声を挙げて三輪智子と踊りだした。蛇になり今は縄みたいにされていた蛇の榊周次も、鎌首をもたげて、踊っていた。そのとき陽一はさそりを踏んづけてしまい。さそりの反撃にあって地面に倒れたのである。

お　知　ら　せ

○大阪哲学学校催しの録音 CD-ROM を会員に貸し出します

哲学学校の催しの録音を、個人の学習のために希望される方に、ウィンドウズ・メディア・プレイヤーで聴ける CD-ROM をお貸しします。費用は実費として五百円を基本とします（配布資料共）。なお、貸出対象は原則として会員・参加者（会員登録は随時受け付け）に限らせていただきます。☞貸出の申し込み・問い合せは、催しの受付または kihou-ha@xpost.plala.or.jp まで

○会員著作の割引頒布

会員の方々が執筆や編集をされた著作物を、著者割引価格にて購入いただけます。催し会場にも一部持参していますが、ご希望があればご連絡ください。

・山本晴義『対話　現代アメリカの社会思想』（ミネルヴァ書房、2003）
・田畑　稔『マルクスと哲学』（新泉社、2004）
・木村倫幸『鶴見俊輔ノススメ』（新泉社、2005）
・やすいゆたか『評伝　梅原猛』（ミネルヴァ書房、2005）
・藤田友治（編著）『「君が代」の起源』（明石書店、2005）　ほか

○「大阪哲学学校通信」第３６号

「通信」第３６号は、４月末に発行予定です。４月半ばごろをめどに原稿をお寄せ下さい

大阪哲学学校のご案内

〈知の歴史〉入門講座・シリーズ４

宗教批判と哲学的意識

―『ソフィーの世界』から John LENNON まで―

●講師：笹田利光さん

（大阪哲学学校参与、園田学園女子大学教授／哲学・哲学史）

21 世紀は、多くの人々の希望的観測とは裏腹に、そして少数の者の予測にほぼ沿う形で、人類の近未来の余り明るくはない展望をなぞりつつあるようだ。90 年代に始まる旧ソ連・東欧社会主義体制の自滅・自壊のプロセスは、それらの体制が現実に内包していた諸矛盾と腐敗の醜悪さを覆い隠しようもなく衆目の前に曝け出した。他方、ライヴァルを喪失した資本主義体制は、驕りと自己陶酔のうちに暴走する資本主義的グローバリズムとして、文字どおり＜弱肉強食のジャングルの掟＞の全球的貫徹を追及しつづけて来ている。

そうした大きな流れの中で、従来から指摘されつづけて来た地球の自然環境の破壊と汚染は急速に進行しつつあり、さらにこれらに加えて、近い将来に 100 億にも達しようかという人口大爆発の問題やそれらに並行するエネルギー危機・食糧欠乏 (飢餓)・＜水戦争＞の現実的で全地球的規模におよぶ危険性が危惧されはじめている。政治的・民族的・宗教的対立は、こうしたさまざまな危機的状況のなかで今後ともいっそう深刻な悲喜劇を人類史の 1 ページに書き加えてゆくことになるのだろうか .....?

今回のこの講座はこうした問題意識を踏まえながら、特に宗教的世界観の根本的構造 (二世界的世界観) とその問題点に焦点を絞り、21 世紀の今も数十億の人々が宗教や＜神々たち＞に常に裏切られつづけながらしかもそれらになお深くとらわれ依存して行かざるを得ない人類的＜業＞KARMA についてともに考えて行きたい。

■２月１８日：第１回「『ソフィーの世界』の内的構造と問題点あるいは＜神＞と人類をめぐって―アニミズム・プラトニズム・＜この世＞と＜あの世＞

■３月　４日：第２回「宗教はいかにして守られるか あるいは唯物論と反唯物論 (パスカル・バークリ・ベルクソン etc.)」

■３月１８日：第３回「ジョン・レノン『ゴッド』の世界とその宗教批判あるいは哲学的射程」

↗※第１回（2/18）のみ隣接の労働センターにて開催します

●時間：午後１時半～５時半ごろ　●場所：尼崎市立労働福祉会館　●参加費：千円（維持会員五百円）